

筑波大学 社会貢献プロジェクト
2016-17

University of Tsukuba

筑波大学社会貢献プロジェクト 2016-17

社会貢献プロジェクトとは

社会貢献プロジェクトは、筑波大学と社会との多様な形での連携活動を学内公募し、総合的に支援するもので、平成 16 年度にスタートしました。本プロジェクトは、特定の分野に限定することなく、地域との連携活動を自由に提案することを特徴としています。「科学振興」、「環境」、「文化・地域活性化」、「健康・スポーツ」、「医療・福祉」、「復興・再生支援」等、内容は多岐に亘っています。

平成 21 年度からは、教員だけでなく学生も申請できるようにし、柔軟かつ自由な発想に基づく課題も増えてきました。平成 28 年度は、66 件の申請のうち、28 件を採択課題（内 5 件は学生の課題）としました。

〈筑波大学社会貢献・地域連携 HP〉
<http://scpj.tsukuba.ac.jp/>

筑波大学社会貢献プロジェクト 2016-17

科学振興・教育

- 筑波大学発 ―おもしろふしぎ理科実験・工作隊―…………… 4
数理物質系 准教授 小林 正 美
- 地域社会貢献のための先端研究・国際活動を生かした小中高校生への理科教育…………… 6
数理物質系 准教授 後 藤 博 正
- 茨城県内の高校交流による数理モデルを用いた地域課題解決提案…………… 7
システム情報系 教授 吉 瀬 章 子
- 超小型人工衛星を用いた体験実習型科学教育による地域・社会貢献プロジェクト…………… 8
システム情報系 准教授 亀 田 敏 弘
- 学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT～… 9
生命環境系 助教 Matt Wood

国 際

- 国際都市つくばの新しい国際化施策 一定住外国籍児童に対する「職育」プログラム…………… 10
人文社会系 准教授 明 石 純 一

環 境

- つくバグ2016 ―虫と遊び、虫に学ぶ―…………… 11
生命環境学群 生物学類 井戸川 直 人
- 環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業…………… 12
生命環境系 教授 田 村 憲 司
- 「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2016…… 13
生命環境系 助教 丸 尾 文 昭

文化・地域活性化

- 「ゆめ花火 2016」…………… 14
つくばけやきっす代表 筑波大学医学群医学類 5年 小林 智 美
- 夏休みアート・デイキャンプ&アートたんけん隊2016…………… 16
芸術系 教授 太 田 圭
- つくさか地域食育支援プロジェクト…………… 17
附属坂戸高校 副校長 石 井 克 佳
- 博学連携による地域文化財の再生と利活用 ―土浦市内における重要遺跡の調査と成果の公開―…………… 18
人文社会系 准教授 滝 沢 誠
- 児童養護施設における学習ボランティア…………… 19
芸術専門学群 4年 宮 山 由 佳
- 「盆 LIVE」…………… 20
人文・文化学群 比較文化学類 杉 山 萌依子

■ 「東北三県柔道キャラバン」	22
体育系 准教授 増 地 克 之	
■ 高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト広報誌を介した地域づくり	23
人間系 教授 原 田 悦 子	
■ つくば市における健康づくり運動を起点とした文化交流活動の促進	24
体育系 教授 長谷川 聖 修	

健康・医療・福祉

■ 成長発育期(小・中学生)に発生する運動器障害に対する「健康手帳」用いた運動器検診とトレーナーによる障害予防活動…	25
医学医療系 整形外科 鎌 田 浩 史	
■ 知的障害を伴う自閉症児の健全育成セミナー	26
附属久里浜特別支援学校 副校長 雷 坂 浩 之	
■ 地域における子育て支援広場事業の開催と乳幼児教育相談の実施	28
人間系 教授 柘 植 雅 義	
■ 住民主導による健康減量教室の普及	30
体育系 教授 田 中 喜代次	

防災・復興支援

■ 復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動	31
体育系 助教 奈 良 隆 章	
■ 常総市復興計画推進に向けた大学院講義と連動したまちづくりワークショップ	32
システム情報系 准教授 藤 井 さやか	

筑波大学発一おもしろふしぎ理科実験・工作隊一

【活動地域：茨城県全域、千葉県、栃木県、福島県】

数理物質系 准教授 小林 正美

1 事業の概要

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

2 事業成果の概要

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。復興支援も視野に入れた南相馬市の小学校での出前実験も実現した。さらに、一般の方を対象とする企画(例えば、つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスティバル、我孫子市市民講座など)も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

3 地方自治体との連携

茨城県	つくば市教育委員会
	大子町教育委員会
	坂東市教育委員会
	県北生涯学習センター
	水戸生涯学習センター
	県南生涯学習センター
	県西生涯学習センター
	鹿行生涯学習センター
	鹿嶋市まちづくり市民センター
	神栖市中央公民館
	守谷市中央公民館
	高野公民館
	霞ヶ浦環境科学センター
千葉県	我孫子市教育委員会
	我孫子市アビスタ
福島県	南相馬市教育委員会



4 今後の展望

より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

平成28年度社会貢献プロジェクト

筑波大学発 -おもしろふしぎ理科実験・工作隊-

小林 正美（物質工学域・准教授） 重川 秀実（物理工学域・教授） 中村 潤児（物質工学域・教授） 木島 正志（物質工学域・准教授）

背景と目的

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

成果

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。それに加え、一般の方を対象とする企画（例：つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスティバル、我孫子市市民講座など）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

平成28年度 出前講義一覧

- 4/2（木）スプリングスクール
- 4/23（土）科学技術週間（総研B）
- 5/22（日）国際植物の日
- 5/26（木）翔洋学園高校
- 6/4（土）霞ヶ浦環境科学センター
- 6/11（土）坂東市教育委員会一日体験
- 6/30（木）幸田町議会地方創生特別委員会
- 7/2（土）つくば市立九重小学校
- 7/5（火）古河市立水海小学校
- 7/9（土）ヒートンクラブ
- 7/7（木）附属駒場高校
- 7/13（水）水戸市立河和田小学校
- 7/24（日）キッズ・マイスター
- 7/27（水）我孫子市生涯学習出前講座
- 7/29（金）鹿嶋市まちづくり市民センター
- 7/31（日）大子町教育委員会
- 8/4（木）リケ女一日体験
- 8/19（金）我孫子市生涯学習出前講座
- 8/20（土）鹿嶋市大野まちづくりセンター
- 8/22（月）土浦市新治児童館
- 8/25（木）守谷市中央公民館・高野公民館
- 9/3（土）つくば市基崎第二小学校
- 9/9（金）つくばみらい市立小絹小学校
- 9/13（火）、14（水）米軍子弟高大連携
- 10/14（金）鹿沼高等学校
- 10/16（日）牛久工芸フェスタ
- 10/18（火）筑西市立五所小学校
- 10/22（土）牛久市立神谷小学校
- 10/26（水）大崎市立東高校
- 11/4（金）筑西市立竹島小学校
- 11/5（土）筑波強 8 並木中等教育学校
- 11/11（金）水戸第一高等学校
- 11/12（土）、13（日）つくば科学フェスティバル
- 11月25日（金）筑西市養蚕小&鹿波ノ江小
- 11/29（火）第一回Ge作製会
- 12/9（金）南相馬市原町第三小学校
- 12/11（日）いばらき子供大学
- 12/14（水）我孫子市生涯学習出前講座
- 1/27（金）県立友部特別支援学校
- 2/5（土）新宿中央公民館
- 2/18（土）春季リケジョサイ・エンスカフェ
- 3/1（水）つくば特別支援学校
- 3/4（土）城ノ内育成会
- 3/8（水）つくばエキスポセンター
- 3/11（土）新治北若草子供会（協和多目的研修センター）
- 3/22（水）つくばエキスポセンター
- 3/26（日）つくばイノベーションプラザ

出前講義写真



今後の展望

今後も、より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

地域社会貢献のための先端研究・国際活動を生かした 小中高校生への理科教育

【活動地域：茨城県つくば市】

数理物質系 准教授 後藤 博正

1 事業の概要

- 1) タマムシ液晶の作製
- 2) 静電気センサーの作成
- 3) 導電性高分子ポリアニリンの合成実験
- 4) クロマトグラフィーの基礎実験
- 5) ラジオの製作
- 6) モアレ干渉縞

などの体験実験に加え

- 7) ボコーダー
- 8) テルミン

などの作動原理説明と体験を行った。

2 事業成果の概要

竹園東小学校6年生、竹園東中学校2・3年生(8・9年生)に出張体験理科実験を行った。夏季にラジオ作成講座を開き、参加者に「つくば初級ラジオ技術者認定証」を与えた。

また、つくば科学フェスティバル2016に出展した。さらに高校時から求められる国際化に対応し、「理科研究発表ワークショップ、高校生英語口頭発表の部(IWP2016 高校生の部)」を設け、これを行った。

微生物学、理論宇宙科学、自然の動きを用いた発電機の開発、イルカの骨格の動きの研究と機械工学、情報科学、中和反応、プロペラのダイナミクス、葉緑素を用いた電池、松茸の香りの根源物質の合成、リーマンゼータ関数、糖電池(バイオ電池)、発色性合金の合成、植物組織を用いた光ファイバー伝送システム、二重らせんDNAを用いた研究、光藻の研究、鹿のフンを用いたガラス材料の作成など、レベルの高い最先端の研究発表が英語で行われた。

発表後の高校生へのコメントは、英語で行った。閉会式では、Rafael Kiebooms氏の講評の後、Kiebooms氏の選出した賞を壇上で授与した。本活動を通して高校生の国際化、および応援を十分に行うことができたと思われる。会議はすべて英語で行われた。

今後もこの会議を行い、国際化を目指した高校生の英語発表の場を提供して行く。国内で高校生英語口頭

発表を行う研究発表会は本取り組みだけであり、2回目となった今年度は話題をふりまいている。

特に茨城県教育委員会、つくば市教育局教育指導課、つくば市内の中学および茨城県内の高校とこれからも連携を深めていきたい。



つくば科学フェスティバル 2016

茨城県内の高校交流による 数理モデルを用いた地域課題解決提案

【活動地域：茨城県日立市・龍ヶ崎市・常総市など】

システム情報系 教授 吉瀬 章子

1 概要

茨城県内の県立高校2校から参加した4チーム19名の高校生を対象として、自ら発見した地域の課題を数理モデルで表現することにより、問題を明確化し、ソルバー FICO Xpress を用いて解決策を提案、提案のその考察とその改良を行う事業を支援した。

2 内容(実施内容・成果・地方自治体との連携等)

①大学教員による数理モデルの出張講義

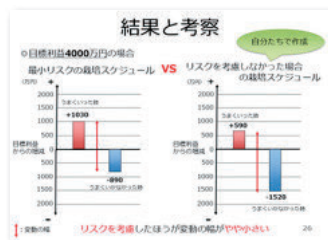
5月20日 (金)	16:00-17:30	竜ヶ崎一高	問題発見・最適化モデルの講義 (吉瀬)
6月24日 (金)	16:00-17:30	日立北	問題発見・最適化モデルの講義 (吉瀬)

②高校生によるテーマの提案

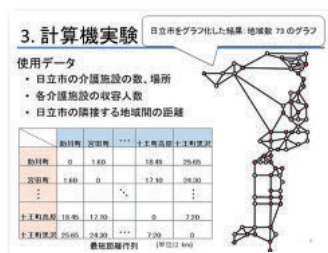
(スライドは「高大連携シンポジウム」資料より)

【日立北高等学校】

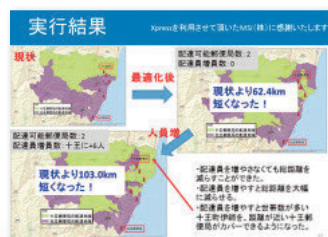
- 作付けする野菜の種類と時期をうまく決めて、期待利益の変動のリスクを最小にしたい



- 新たな介護施設の配置をうまく決めて、介護施設利用者の総移動距離を最小にしたい

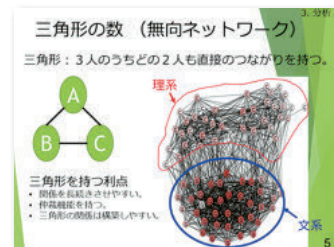


- 郵便局の担当範囲をうまく決めて、郵便局員の移動距離を最小にしたい



【竜ヶ崎第一高等学校】

- 情報伝達経路をうまく決めて、情報伝達人数を最小にしたい



- 選挙区と議席数をうまく決めて、一票の格差を最小にしたい



③筑波大学モデル化合宿（8月17日～19日）

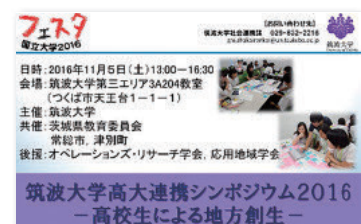
「筑波ふれあいの里」でモデル化合宿を行い、その成果を合宿発表会で報告した。

④TAのサポートによるデータ収集とモデルの改良

各高校を担当する4～6名のTAが、9月～11月にかけて、それぞれ約4回程度TA4～6名が訪問し、モデル化の改良や発表スライドの準備を行った。

⑤紫峰祭における「高大連携シンポジウム」

右記のシンポジウムで発表を行い、大山達雄日本オペレーションズ・リサーチ学会長より講評を頂いた。



3 今後の展望

平成29年度も日立北高校、竜ヶ崎第一高校から事業の継続の要望があり、TAとともに取り組む予定である。

4 その他

- 2. ⑤で述べた「高大連携シンポジウム」のレポートが、学術誌「オペレーションズ・リサーチ」Vol.62 (2017), No.2, pp.122-125に掲載された。

超小型人工衛星を用いた体験実習型科学教育による 地域・社会貢献プロジェクト

【活動地域：茨城県つくば市】

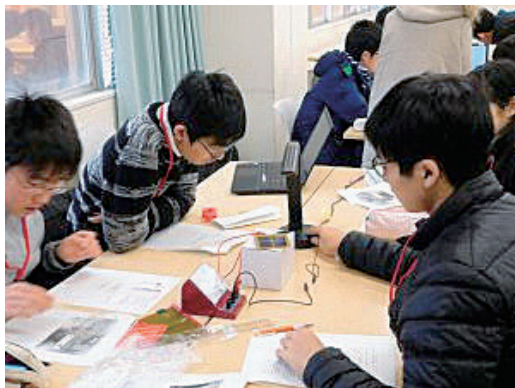
システム情報系 准教授 亀田 敏弘

1 事業の概要

筑波大学が開発した超小型人工衛星 ITF - 2 (2017 年 1 月 16 日に ISS「きぼう」から放出) と構想中の超小型低価格衛星 ITF - 3 を題材に、総合理工学分野の体験実習型教育を行い、中高生に対する科学振興を行った。多くの中高生が参加できるようニーズに応じてレベルを調整する。地域・社会貢献を通して科学の街つくばの拠点である本学の魅力を伝えると同時に、本学学生のサイエンスコミュニケーション能力の涵養も重視した。

2 事業成果の概要

採択後、内容の改善に向けての取り組みを開始し、低価格化の進んでいるソフトウェア無線機を用いた実習を取り入れ、参加者が衛星信号受信を後日実際に挑戦できるように工夫した。筑波大学の GFEST プロジェクトと共催で中高生に対する事業を実施することとなり、社会貢献する・される側という考え方ではなく、事業を通して中学・高校生を育てる機会であることはもちろん、大学生のサイエンスコミュニケーション能力を高める機会としても重要な位置づけであることを確認し、双方にとって Benefit のある事業となることを目指した。双方向型の社会貢献事業モデルの提案例として、他分野にも応用可能な成果と考えられる。



太陽電池特性試験の様子

日 程	2017 年 1 月 8 日(日)・9 日(月・祝)
時 間	1 月 8 日 13:00 集合 - 17:00 解散 1 月 9 日 9:00 集合 - 14:00 解散
場 所	筑波大学 3A 棟 209 室
講 師	筑波大学衛星プロジェクト学生 9 名、亀田 (計 10 名)
参加者	中学生: 16 名、高校生: 19 名 並木中等教育、筑波大学附属高校ほか
実 施 テ ー マ	衛星信号受信、無線工学の基礎、 太陽電池特性試験

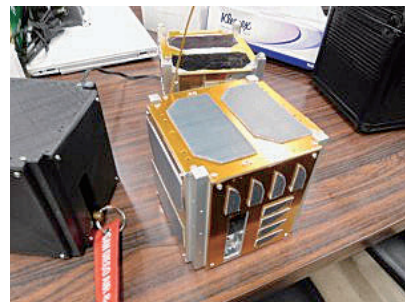
さらに、次年度に向けた試行的取り組みとして、1 月 22 日(日)に社会人向けのプログラムを実施した。参加者数は 7 名であった。

3 地方自治体との連携

GFEST との連携により、並木中等教育学校から多数の参加があった。今後も連携を進めたい。

4 今後の展望

中高生にとって、人工衛星開発が大学内でできることを示すことで、良い刺激が与えられることが確認できた。社会貢献事業として、社会



筑波大学人工衛星の模型

人に対するプログラムを実施したところ、太陽電池特性試験や衛星信号受信など、宇宙系の内容は文科系出身の参加者にとっても興味を持ちやすいようであった。様々な年齢層の方々に対しての社会貢献事業を今後も継続したいと考えている。

学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループSCOUT～

【活動地域：茨城県つくば市等】

生命環境系 助教 Matt Wood

1 事業の概要

筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ・スカウト(SCOUT: Science Communication of the University of Tsukuba)として平成21年4月に活動を開始して以来学生メンバーは40名を超えている。

スカウトは、地域に対する社会貢献としての科学あそびラボを多数開催しており、学生たちのサイエンスコミュニケーション実践の場としての意味も非常に大きい。ここ数年サイエンスコミュニケーションの重要性が叫ばれるが、学生が実際に経験する場は少ない。その意味で子どもたちに対して科学を伝える「科学あそびラボ」は学生にとって非常によいトレーニングとなっている。

2 事業成果の概要

科学技術週間に行われる筑波大学キッズユニバーシティおよび国際植物の日に、「科学あそびラボ」として、小学生を対象にした科学実験を行った。また、筑波大学と連携している大子町や南相馬市の中学校の来学時に、科学実験を行った。

平成28年度からは、つくば市内での活動を増やしている。LALAガーデンつくばのTSUTAYA書店、土浦イオンモールの未来屋書店で主に小学生を対象とした科学遊びラボを開催した。全イベントでの参加者数は400名を超える。

開催日時	内 容	参加人数
筑波大学キッズユニバーシティ 2016.4.23	色が変わる不思議なお絵かき	150名程度
国際植物の日 2016.5.22	色が変わる不思議なお絵かき	50名程度
LALAガーデンつくば 2016.7.9	色が変わる不思議なお絵かき	80名程度
大子町中学生の筑波大学訪問 2016.7.26	アイス作り実験	40名程度

開催日時	内 容	参加人数
LALAガーデンつくば 2016.11.19	松ぼっくりでクリスマスツリー	80名程度
土浦イオンモール 2017.3.11	クロだけでカラフルツリー	80名程度

3 地方自治体との連携

大子町、南相馬市と筑波大学の連携事業に積極的にかかわっている。またキッズユニバーシティには、つくば市内の小学生が多く訪れており、筑波大の学生との交流も深めている。



キッズユニバーシティの様子

4 今後の展望

昨年度目標としていた「つくば市内での活動を増やす」ということについては、つくば市内の書店での科学遊びラボの開催により、達成できた。次年度以降も、継続的に実施を求められているので、このまま活動を続けたいと考えている。今年度は、科学遊びラボの企画、運営をほとんど学生のみで行った。学生にとっても、イベントの企画、運営を行い、多くの人と関わることはいい経験となっていると考える。

国際都市つくばの新しい国際化施策 —一定住外国籍児童に対する「職育」プログラム

【活動地域：茨城県つくば市ほか】

人文社会系 准教授 明石 純一

1 事業の概要

本事業は、つくば市に居住する外国籍住民、おもに青少年や児童に対する職業教育（以下、職育）支援を実施するものである。彼（女）らに対して進学・進路指導やキャリアアッププログラムを提供するとともに、同事業の趣旨と目的を共有するグループ間のネットワーク化を積極的に進め、事業の効果的運営を試みている。2016年度は、大学（教員・学生）、自治体（茨城県、つくば市、常総市）、公立学校、大使館、NPO、企業、支援対象者との協力体制をさらに強化し、「職育」活動を広範囲に展開した。事業の企画と運営にあたっては、財団法人日伯経済文化協会（ANBEC）やNPO 法人国際社会貢献センター（ABIC）とも連携をはかり、その専門的リソースを、外国籍児童に対する支援に活かしている。

2 事業成果の概要

第一に、進学支援を実施した（表の左欄①）。第二に、「筑波大学おもしろふしぎ理科実験・工作隊」とのコラボレーション企画を外国人児童向けに開催した（②）。第三に、キッザニア東京における就労体験実習の準備を行った（③）。第四に、外国人学校卒業生への進路相談会を行った（④）。第五に、職業レディネステストを活用したキャリア支援を行った（⑤）。客観的な指標を伴う上記の職業アセスメントツールを外国籍児童の支援に活用するもので、本事業の成果の応用といえる。第六に、外国籍住民の支援に関わる専門家を招聘し、フォーラムを開催した。本学からも同分野に関心がある教員や大学院生が複数参加した（⑥）。第七に、ワークショップ（教育とキャリアによる夢の実現に向けて）を開催した（⑦／写真）。同イベントにはつくば市や茨城県内外から関係者を招き、筑波大学発の本事業を通じて得られた知見や課題の普及に努めている。本事業を盤石にするために様々なステークホルダーから共感を引き出し、その結果として協力を取り付ける機会として位置づけている。上記七つの活動は、多くの外国籍児童の「学ぶ動機」と「働く意欲（想像力）」を長期的に高めることを目的としたもので

あり、地域の教育関係者から好評を得ている。また結果的に、本学学生の異文化理解や国際交流の実践経験にもつながった。2017年度中に本事業の成果を国内外のシンポジウム等で報告する予定である。



ワークショップの開催風景（筑波大学1C棟）

平成28年度の活動内容

	活動項目	回数	延べ参加人数(概数)
①	進学支援（旧日本語・日本社会文化講座）	30	100
②	コラボ出前講義	3	100
③	キッザニア授業・体験	16	240
④	外国人学校卒業生への進路相談会	4	40
⑤	職業レディネステスト	5	100
⑥	有識者フォーラム	1	15
⑦	ワークショップ	1	70
⑧	連絡協議会	4	25

3 地方自治体との連携

イベントへの参加依頼や情報共有・意見交換を中心に、県内の教育機関関係者（公立学校の国際担当教員ほか）や国際課等との協力を多面的に進めている。

4 今後の展望

平成22年度より採択されている本事業・活動への参加者数は、平成29年3月末現在に至るまでのべ2,800名を超える。こうした実績を踏まえ、地方自治体との連携をより強化、公式化していくことが望まれる。上を念頭に置きつつ、大学発地域実践型の国際社会貢献モデルを示すことを引き続き目指していきたい。

つくバグ 2016ー虫と遊び、虫に学ぶー

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境学群 生物学類 井戸川直人

1 事業の概要

地球規模の環境問題が進行しつつある現在、市民の環境意識を高めることが重要視されている。しかしながら、地域社会や学校教育の変化により、現代の子供たちが環境について体験的に学ぶ機会は少ない。本課題では、生物学・農学を専攻する学生が、つくば市周辺の市民に向けて、昆虫を題材とした自然体験の場を開催し、地域の環境について体験的に学ぶ場を提供する。

2 事業成果の概要

2016年は、以下の活動を通して、多角的な切り口から人々の環境意識を高める試みを行なった。

- ① 観察会「土の中の生き物を見てみよう！」(春)
- ② 筑波大学図書館におけるポスター展示(夏)
- ③ サイエンスカフェ「むしくうべ2」(秋)
- ④ 学園祭展示「むし虫ミュージアム」(秋)

春の観察会では、つくば市周辺の小中学生を対象に、土壌動物の観察会を行なった。土壌動物は季節や天候にかかわらず採集することができるため、自然観察会の題材としてきわめて好適であるといえる。また、シロアリやダンゴムシを題材とした行動実験の実演も好評であった。結果として、子供たちに足元の生態系へ目を向ける機会を提供できた。

大学図書館における展示では、学生図書館を利用する様々な専攻の学生および市民を対象に、つくば市周辺の自然環境を、昆虫に焦点を当てて紹介した。カブトムシやクワガタムシ、ホタルといった昆虫が身近に生息することに驚いた、といった感想が寄せられた。

サイエンスカフェ「むしくうべ2」では、事前に募集した参加者を対象に、昆虫を食材に用いた料理をふるまうとともに、食料資源としての昆虫の可能性について議論した。

学園祭の展示企画では、昆虫の生体・標本・スケッチ・写真・動画など、あらゆる展示手法を駆使することにより、来場者に生物の多様性やその素晴らしさを伝えることができた。この展示は幅広い年齢層に高い

評価を得て、学園祭実行委員会から展示企画の最高賞であるアカデミー賞を授与された。



土壌動物観察会の様子



サイエンスカフェで提供された昆虫料理

3 地方自治体との連携

児童館などに参加者募集ポスターの掲載を依頼した。

環境マイスターの育成による地域環境教育の推進 および環境保全事業

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系 教授 田村 憲司

1 事業の概要

本プロジェクトは、環境に対する正しい知識と技能を身につけ、地域社会において環境教育や環境保全の指導者となる市民を育成する事業である。つくば市の水・土・生物などの自然環境、文化・都市環境を習得テーマとし、地域特性の高い環境教育を行う。本事業により認定を受けた環境マイスターはつくば市やNPOが実施する各種事業の中核となって活躍し、市民の環境意識向上及び環境保全活動への積極的な参加に努めることになる。

2 事業成果の概要

「サステナビリティ」をテーマとしたマイスター講座については、具体的には、以下の日程で行なった。

第1回 水域生態系

（講師：濱 健夫・田村憲司）6月25日（日）

第2回 霞ヶ浦実習

（講師：腰塚昭温）7月10日（日）

第3回 環境教育（博物館視察）

（講師：田村憲司）8月7日（日）

第4回 つくば市内緑地実習

（講師：上條隆志）9月18日（日）

第5回 1級認定希望者発表

（講師：田村憲司）10月2日（日）

さらに、1級取得者を対象に下記のとおり、フォローアップの講習を行った。

環境マイスタースキルアップ講座

（講師：田村憲司）12月4日（日）

3 地方自治体との連携

本事業は、つくば市と筑波大学との連携事業であり、受講生のうち、一定の条件を満たし審査に合格した者は、その水準に照らして、環境マイスター1級から3級を授与される。本年度も、2017年3月21日

に本学学長応接室において授与式が行われ、永田学長から環境マイスターの証書が授与された。

環境マイスターの証書を授与された者は、つくば市主催の環境関連事業等において、コーディネーターや専門ボランティアとして活躍することが期待されている。



認定証授与式（2017年3月21日 学長応接室）

4 今後の展望

本事業は、平成17年度の開始からのべ200名以上の市民が受講し、環境マイスター1級取得者は20名となり、着実に成果を上げてきている。つくば市側の所管部局である環境生活部環境課も、環境マイスター授与者の活用方法について、積極的な検討を進めている。今後、当事業修了者が、つくば市における環境関連取り組みの推進役になるとともに、本事業が本学の環境教育の一翼を担うものとしてより発展することが期待される。

「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的发展 2016

【活動地域：茨城県取手市】

生命環境系 助教 丸尾 文昭

1 事業の概要

「いもりの里」では、関東平野の典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践している。本事業では「いもりの里」（地域の宝／サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら、周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援する。

2 事業成果の概要

これまでの活動を通じ、地域住民サイドからは「いもりの里」の継続活用と維持継承を望む声が、行政サイドからは類似の事業展開を探る声が強いことが分かった。そこで初期整備を終えた「いもりの里」をモデル拠点として本格的に活用・維持しながら、科学学習支援や周辺地域への拡充計画策定支援・提言を継続的に実践している。

田植え・稲刈り・収穫祭等の様々なイベントや生命環境関連の様々な総合学習プログラムは、いもりの里協議会が中心となって、行政、教育委員会・学校、地域住民の協力も得ながら、年間13回開催した。

表. 平成28年度 いもりの里年間行事

開催日	内容	参加人数
4/17(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 草もち作り、春の花・いもり観察	72名
5/8(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 どろんこ田んぼ運動会、ザリガニ釣り	105名
5/29(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 田植え、田んぼの生き物観察会	123名
6/19(日)	取手いもりの里 生き物観察会 土壌生物観察、いもり観察	97名
7/18(月祝)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 竹細工(竹水鉄砲)、ザリガニ釣り(外来生物について)	80名
8/7(日)	取手いもりの里 星空の下の科学教室 講演会、灯火採集	53名
9/11(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り、いもり観察	86名
10/16(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 収穫祭(主催:良塚・上高井地区農村環境活用推進協議会)	124名
11/13(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 葉っぱスタンプ オリジナル手ぬぐいづくり	49名
12/17(土)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 クリスマスリース作り	23名
1/29(日)	取手いもりの里 生き物観察会 鳥の観察	31名
2/26(日)	イモリ学習会 再生の不思議、イモリの卵や幼生観察、イモリ幼生の飼育法	41名
3/26(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 デイキャンプ	25名



図. 稲刈り(9/11)田んぼで見つかったアカハライモリ

3 地方自治体との連携

取手市役所まちづくり振興部を中心に「いもりの里」の候補地選定時以来10年にわたり支援をいただいている。取手市から地元（いもりの里協議会）への公募補助金が継続的に採択されているほか、イベント運営スタッフへの市役所職員の方々の参加、有害外来生物（アライグマ）の駆除など、地域住民との3者間で連携した円滑な協力体制が確立している。

4 今後の展望

周辺小学校での科学体験学習（イモリ飼育体験ほか）を取手市と計画調整し、いもりの里近隣の高井小学校で試行した（平成25年度）。並行して、家庭での飼育体験プログラムも提供している。今後は、イモリネットワーク・ジュニアとして対象家庭や対象校を拡充し、「いもりの里」を生命環境教育の拠点としても発展させていく。また、世界で唯一のアカハライモリ・ストックセンターとしての役割（Nature Protocols 6:593-599, 600-608, 2011 ほか）に記載も益々重要になってくると思われ、イモリ野外生態観察場を区画化して科学的な追跡調査を容易に行えるように改修し、繁殖環境の整備にも力を入れている。

5 その他

- 1) テレビ放映（BS Japan 未来EYES(8/14)）
- 2) ポートフォリオはイモリネットワーク(Japan Newt Research Community)のWebページに随時掲載
<http://imori-net.org/>

「ゆめ花火 2016」

【活動地域：茨城県つくば市】

つくばけやきっず代表 筑波大学医学群医学類 5年 小林 智美

1 事業の概要

「ゆめ花火」とは、入院中の子どもたちが「夢の花火」をテーマに描いた絵を筑波大学の学園祭で本物の花火にして打ちあげ、子どもたちと鑑賞する企画です。

入院中の子どもたちは、日々辛い検査や処置などに耐え、必死に病気と闘っています。ご家族にとっても最愛のお子さんの入院は想像以上にショックであり、その負担は大変なものです。「花火を通じて幸せを届けたい」「子どもたちにも夢と希望を持ってほしい」という気持ちから筑波大学花火研究会、賢謙楽学が2011年に共同で「ゆめ花火」を立ち上げました。2013年度から学生有志つくばけやきっずが賢謙楽学より業務を引き継ぎ、筑波大学花火研究会と共同で企画を行っています。本年度で6回目の打ちあげとなりました。

「ゆめ花火」の実現にあたり、私たちは「ゆめ花火プロジェクト」を企画し、病院との連携、子どもたちとのふれあいを主な活動としました。実際の花火作製や打ちあげなどの作業については筑波大学花火研究会・筑波大学学園祭実行委員会・(株)山崎煙火製造所の皆様にご尽力いただきました。鑑賞会当日は観覧会場に原画を描いた子どもたち、また入院中の子どもたちとご家族を招待し、レクリエーションなどを行い、楽しんで花火を鑑賞していただける企画を目指しました。

2 事業成果の概要

今年は17種類の原画を元に、56発の花火の打ちあげとなりました。参加されたご家族は17家族58名、うちお子さまが26名で、過去最高人数となりました。幸いお天気にも恵まれ、鑑賞会は盛況のうちに終了となりました。参加されたご家族の方から、「辛い事が多い闘病生活でしたので、辛く悲しい記憶が殆どでしたが、美しく打ちあがる花火の数々に心が洗われる思いがしました。一生忘れられない大切な思い出になりました」とお手紙をいただきました。また、お子さまは打ちあげられる花火を、窓際にぴったりと張り付けてじっと見上げたり、わあっと歓声を上げたりと、表情豊かに鑑賞していました。ほんの少しでも

楽しい時間を過ごせたと思ってくだされば幸いです。



実際に打ちあがった花火（虹）

3 地域との関わり

今年は筑波大学広報室の広報誌「TsukuComm」と、常陽リビング社さんから取材を受け、素敵な記事を書いていただきました。常陽リビングさんの記事を読んだ方からつくばけやきっずへお手紙をいただくなど、広報の重要性、影響力を感じました。病院内にリーフレットを置いて活動の紹介をさせていただき、これを読んだ「小児患者家族のおしゃべり会」の方と交流が始まり、鑑賞会にご招待したり、おしゃべり会のイベントに参加したりしました。このように、新聞記事やリーフレット、ポスターなど広報を通して、少しずつ私たちの活動が広まってきたように感じます。

4 今後の展望

「ゆめ花火」、「ゆめ花火プロジェクト」は様々な団体に関わる企画のため、実現には様々な困難もありますが、毎年の鑑賞会を楽しみにして下さるご家族がいること、少しずつ地域での知名度が上がってきたことを踏まえて、つくばけやきっずでは来年も花火鑑賞会を実施したいと考えています。

5 その他（関連団体一覧）

「ゆめ花火」

共同企画：つくばけやきっず、筑波大学花火研究会
「ゆめ花火プロジェクト」

企画：つくばけやきっず

協力：筑波大学附属病院、アスパラガス、
スターバックス筑波大学附属病院店

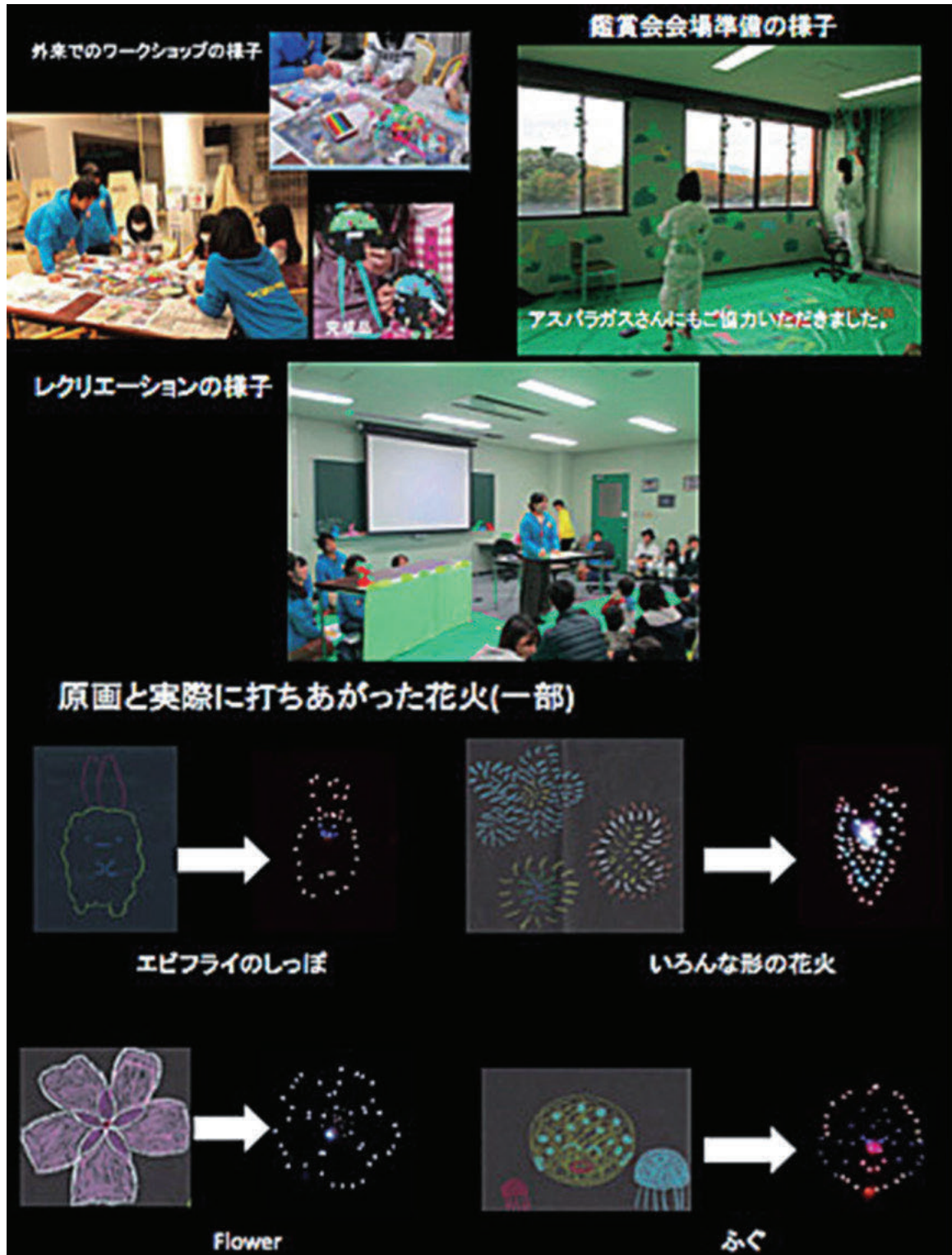
「筑波大学学園祭後夜祭花火第一部」

主催：筑波大学学園祭実行委員会

協賛・協力：つくばけやきっず

協力：筑波大学花火研究会

6 追加資料



夏休みアート・デイキャンプ&アートたんけん隊 2016

【活動地域：茨城県つくば市】

芸術系 教授 太田 圭

1 事業の概要

平成 20 年度に同内容のプロジェクトを開催してから、平成 28 年度で 9 回目を数えた。参加者は年々増加し、筑波大学の芸術が実施する夏休みのイベントとして定着しつつある。実施の背景には、小中学校で学ぶ、「図画工作」や「美術」の授業時間数の減少化によって、長い時間をかけてものを見て描くことや、実物の作品を鑑賞するといった、表現や創造性、感受性などを育む経験が乏しくなっているという現状がある。それらに対して、筑波大学で芸術に関わる人的財産（教員と学生）と芸術資産（学内の展示作品、学生アトリエ）を活用する本プロジェクトを通し、創造的で、豊かで自由な心を持つ人間形成に資することを目的とした。

2 事業成果の概要

本事業は「制作と鑑賞」を柱として、3つのプログラムで構成されている。

【1 アート・デイキャンプ】（7月18日、19日実施）

体芸エリア 5C 棟の大石膏室を中心会場として、大型石膏像のダビデやニケ像、鳥の剥製や鉢植え植物などを「観察」して写生した。

【2 アートたんけん隊】（7月18日、19日実施）

本学内に展示されている作品の鑑賞と、学生のアトリエを見学するプログラムで、大学院生が用意した「鑑賞ツール」を用いて楽しく鑑賞した。

【3 夏休みアート・デイキャンプ展】

（8月25日～30日実施）

「アート・デイキャンプ」で制作した作品による展覧会で、事前の審査会を経て選ばれた優秀作品には賞を授与した。会場は茨城県つくば美術館で、応募者全員の作品を展示した。本事業は、（公財）つくば文化振興財団、つくば市と連携して実施しており、平成 25 年度から「つくば市長賞」が設けられた。また「筑波大学学長賞」も設けられている。

3 地方自治体との連携

前年同様、つくば市、（公財）つくば文化振興財団と

連携し、立案から実施まで、運営資金の一部及び人的な協力体制を作って実施した。参加者募集では、つくば市教育委員会の協力を得て、つくば市内の全小中学生にチラシを配布した。（約 22,000 枚）

4 今後の展望

平成29年度に採択された場合は、10回記念として、つくばエクスプレス沿線市町村にも参加を呼び掛け、本学の芸術教育活動・社会貢献としてアピールする。

5 その他

夏休みには、学校外のイベントや学習塾などがあるにもかかわらず、2日間で 400 名を超える参加者がいたことは、「科学のまち・つくば」における「情操教育」への期待の現れだろう。また9年の間に本学の芸術専門学群入学者を輩出したことは、本事業の副次的成果であると受け止めている。

今後への期待として、つくば市居住の外国人研究者の子女や、特別支援学校の子どもたちにも是非参加していただき、アートを通じた交流の輪を広げたいと願っている。



アートたんけん隊（左）



アート・デイキャンプの様子（本学、大石膏室）

つくさか地域食育支援プロジェクト

【活動地域：埼玉県坂戸市】

附属坂戸高校 副校長 石井 克佳

1 事業の概要

現在多くの小中学校で農業体験を通じた食育学習が行われているが、農業の専門教員が指導できない環境下では、栽培や飼育などの学習成果を十分に得られないという声が多く聞かれる。そこで本プロジェクトでは、本校のこれまでの農業教育活動の実績を原資に、近隣の小中学校での農業学習支援や、本校をフィールドとした農業体験授業の実施、また各校のニーズに合わせた給食食材の提供などを行って、様々な食育機会を支援する活動を行っている。

2 事業成果の概要

2.1 小中学校での活動

- (1) 小学校農業学習への出前授業
4月25日 於：市立坂戸小学校5年生
- (2) 小学校5年生 野菜栽培学習への指導助言
5月～12月 於：市立坂戸小学校菜園
- (3) 小学校2年生 ミニトマト鉢栽培への指導助言
5月～7月 於：市立坂戸小学・南小学校
- (4) 小学校3年生への収穫物調整体験学習の実施
6月13・20日 於：市立坂戸小学校各教室
- (5) 小学校2年生 ダイコン栽培学習への指導助言
9月～12月 於：市立南小学校菜園



本校生徒による大根栽培学習の指導（南小学校2年生）

2.2 本校での活動

- (1) 小学校5年生担当教員への栽培学習指導
4月25日 坂戸小学校5年生担任4名
- (2) 小学校2年生 農場探索学習の実施
6月14日 南小学校2年生80名
- (3) 小学生の食育体験学習会の指導（坂戸市主催）
8月7日 坂戸市内の小学生20名
- (4) 小学校1年生 農場探索学習の実施
9月27日 南小学校1年生75名
- (5) 特別支援学校との秋冬野菜栽培学習の実施
9月～12月 市内5校の特別支援クラス35名



特別支援学校との秋冬野菜栽培協働学習

2.3 給食食材の提供

支援先各校の担当教員と連携により、ニーズに合わせた品種選定と出荷時期の調整を行って、本校農場で生産した野菜を給食食材として提供した。

期 間：7月～12月

対 象：坂戸中学校・南小学校・坂戸小学校

品 目：トウモロコシ・ハクサイ・ダイコン
キャベツ・ブロッコリー・カブ 他

3 地方自治体との連携

坂戸市教育委員会と随時連携を図りながらプロジェクトを進めている。H28年度は小規模ながら市の予算化が実現し、学校菜園用に堆肥・石灰・肥料が購入され、市内各校菜園の維持管理に利用されている。

博学連携による地域文化財の再生と利活用 —土浦市内における重要遺跡の調査と成果の公開—

【活動地域：茨城県土浦市】

人文社会系 准教授 滝沢 誠

1 事業の概要

地域の歴史や文化を語る上で欠かせない文化財の中には、市民による理解が不足し、地域の中で十分に活用されていないものが多い。こうした問題意識のもと、本事業では、土浦市立博物館と連携しながら市内の重要遺跡を再調査し、そのあらたな価値を市民にわかり易く伝えるための展示と公開講座を実施した。

2 事業成果の概要

事業の目的に沿って、①后塚古墳の測量調査、②王塚古墳の模型製作と展示、③公開講座を実施した。

①后塚古墳の測量調査：后塚古墳（土浦市手野町）は、これまで古墳時代前期の前方後方墳とみられてきたが、その形態や規模については判然としない部分があった。そこで、2016年12月、本学の考古学実習を兼ねて精密な測量調査を行った結果、墳丘長約54mの前方後方墳であることがほぼ確認された。

②王塚古墳の模型製作と展示：王塚古墳は、后塚古墳に隣接する市内最大の古墳である。2015年に代表者が測量調査を実施し、墳丘長約84mの前方後円墳であることを確認した。この成果をもとに、人文学類生が同古墳の模型を製作し（写真1）、公開講座の際に上大津公民館で展示を行った（その後土浦市に寄贈）。



写真1 王塚古墳の模型

③公開講座：2017年2月4日、地元の上大津公民館で「王塚・后塚古墳が語る古代の土浦」と題する公開講座を実施した。この講座では、代表者が講演を行うとともに、土浦市立博物館副館長の塩谷修氏が周辺の関連遺跡に関する講演を行った。また、王塚古墳の模型を会場に展示し、人文学類生によるプレゼンテーションを行った（写真2）。当日は、市内外から約80名の参加者があり、さらなる学術調査と地域文化財としての利活用に期待する声が多く寄せられた。

3 地方自治体との連携

本事業は、土浦市立博物館との緊密な連携のもとに実施した。また、公開講座の会場確保や広報においては、上大津公民館の全面的な協力を得た。

4 今後の展望

土浦市立博物館との連携をさらに強化していく予定である。とくに次年度以降は、発掘の見学や体験を取り入れた事業を展開していきたいと考えている。

5 その他

本事業の成果については、茨城新聞2017年1月17日付朝刊、常陽新聞2017年1月18日号、同2月6日号で詳しく報じられた。



写真2 王塚古墳の模型(机上)について説明する人文学類生

児童養護施設における学習ボランティア

【活動地域：茨城県つくば市】

芸術専門学群 4年 宮山 由佳

1 事業の概要

一般的に学力が平均よりも低いと言われる児童養護施設の子供達に、学習支援を行う。子供達との信頼関係の構築や、離職率が高めである施設職員の方々の負担を軽減するなど、勉強以外の面からもサポートする。

2 事業成果の概要

本活動の目的は大きく二つあり、一つ目は子供たちの学力の向上、二つ目は学生と子供たちの間の信頼関係を構築し、子供たちの自尊心、自己肯定感を高めることである。

第一の目標については、忙しさ故に子供の学習に個別の援助ができない職員の方々の代わりに、その役目を学生が負えたという点で大きな成果だったと考える。また、主に夕方に活動時間を固定し、子供の学習習慣の形成を助けることにもつながった。

第二の目標については、今年度から、一人の子どもを担当とする方式から、複数の子どもを担当する方式に変更となったため、個別での信頼関係をはぐくむことはやや難しかった。しかし、イベントへの参加も通して、子供達をより理解することができた。特に夕涼み会のイベントは、通常の活動ではあまり触れ合うことのない子供達と交流するよい機会であった。また、勉強ではなく外でスポーツやバーベキューなどをして一緒に遊ぶことがメインであるため、子供たちの絆が深まりやすい。職員の方と話をする時間も多取れるため、子供達に関して普段自分では気づけないことを教わり、その後の活動に活かすことができた。

なお、一人の子どもを担当とする方式から、複数の子どもを担当する方式に変更となった経緯としては、昨年度まで 19:30 から活動を行っていたが、小学 4 年生以下の幼い子供達が就寝前に興奮してしまい職員の方の負担が増えるとの話があったため、まず活動開始時間を 16:30 に変更した。結果、負担は減少し、さらに夕飯前に学習ボランティアと宿題を終わらせるという目標設定をすることで子供達の学習意欲が向上した。また、時間変更に伴い、大学の授業と

の兼ね合いが難しく活動に参加できる学生の変動が大きくなったため、従来の「1対1の担当制」から「1学生に対して複数の子ども」という体制をとることにした。結果として、これまで担当学生が付いていなかった子供達にも学習指導をすることができ、複数人を同時に指導するため子供達の協調性の向上を図ることに繋がった。その一方で、独占欲の強い子どもの不満への対処をいかにするかという課題も生まれた。

年間活動スケジュール

2016 年 5 月	メンバーと子ども達が対面
6 月	職員の方と今後の活動方針に関する話し合い（一部担当変更）
8 月	職員の方との懇親会 夕涼み会
12 月	餅つきイベント・職員の方による学習会

※不定期にメンバーが集まって児童養護施設や発達障害に関する学習会を行った

3 地方自治体との連携

活動時間外の子供達の様子等、施設との情報共有をこまめに行い、互いの状況を把握しながら臨機応変に担当・活動時間の変更を行った。

4 今後の展望

複数人を同時に指導することにより独占欲の強い子供の不満が生まれやすくなったため、その解決策を講じる必要がある。

「盆 LIVE」

人文・文化学群 比較文化学類 杉山萌依子

この度、2016年9月17日（土）15:00～20:00に研究学園駅前公園にて「盆 LIVE2016」を開催致しました。改めまして、本プロジェクトを実施するにあたり、ご助力頂きましたことを深く御礼申し上げます。

1 Theme: 生演奏に包まれて、つくば生活の第一歩を

私たちは、昨年度に引き続き「つくばに暮らす全ての立場の人が担い手となり、共に楽しむことが出来る祭りの創造」を目指し、結果的に県外・海外出身の住民が、主体的につくば市民との生活をつくることの実現を心掛けてきました。参加しやすく一体感の持てる祭りを実施し、外部出身者が地域に自ら歩み寄りながら、つくば市民として主体になれる場の提供を目指しました。

2 Activity : 実行委員会の活動

- (1) 盆 LIVE の運営：日本ならではの全員参加型・非言語ライブエンターテイメントでつながりを創出。
- (2) 地域との関係づくり：研究学園地区へのイベント運営参加／吉瀬地区の御囃子保存会との交流
- (3) 留学生との交流：学内で盆踊りの体験会「踊練」を開催（2ヶ月程度、週2回）

3 Main Event : 盆 LIVE2016

コンセプト：「満月」月に関わる曲目、幕、ライト等の作成。

開催日時：2016年9月17日15:00～20:00(満月)

開催場所：研究学園駅前公園

主催：盆 LIVE 実行委員会

共催：筑波都市整備株式会社

後援：つくば市、つくば市教育委員会、T-ACT

動員数：5時間延べ1000人達成

プログラム・活動写真：別紙参照

4 Voice : お客様の声

「ライブ演奏での盆踊り、うきうきしました」「(吉瀬地区の御囃子の様に) 伝統芸能も来ているところが良かった」「外国の方が沢山来ていたことが印象的」「進行の仕方がまだ不十分、時間も押していた」「音量が大きい」

5 Next : 来年度に向けて

参加者数で目標を達成した一方、お子さん・外国の方への対応の不十分さが目立ちました。また一件ではありますが、騒音に関してメッセージを頂いたため、今後イベントを続けていく上で市民の方々の迷惑とならないよう、細心の注意を払っていきます。

しかし、留学生・市外からの参加者・予め浴衣を着て参加して下さった方も多く見られ、昨年度よりも参加者の多様化と知名度の向上に成功しました。さらに、既存の地域の祭りに運営や出演者として協力させて頂けるようになり、只の学生ではなく対等なつくば市民として協力して頂きました。つくば市の新たな文化活動の推進・若者や海外出身者と地域社会の接点づくり・つくば市の対外的アピールの推進の一助となったと考えています。来年度も、今年度の反省を生かしながら、築くことの出来た地域との縁を生かす祭りに成長できるよう邁進して参ります。地域社会に認められる文化活動となることで、つくばをさらなる魅力ある姿に活性化させます。

私たちは、昨年度に引き続き

「県外・海外出身の住民が、主体的につくば市民との生活をつくる」ことを目指してきました。

同じ時、同じ場所につくばで出会った住民同士が、触れ合う袖に多生の縁を感じてもらう。

そんな場を提供するべく、活動してきたのが「盆 LIVE」です。

つくば市は、外国籍の方をはじめ、毎年多くの県外の方が入学・勤務するため集い、数年後に去っていく街です。

地域社会の既存のお祭りには、ちょっと入りづらいな…と感じる人々のために、参加しやすく、一体感の持てるお祭りを実施することで、

外部出身者が地域に自ら歩み寄りながら、つくば市民として主体になれるような場の提供を目標にしています。

Thema



盆LIVE

委員会の活動

■盆LIVEの運営

日本ならではの全員参加型・非言語ライブエンターテインメントでつながりを創出。

*point

- (1) 経験が少ない・言葉が通じなくても楽しめる「音楽・ダンス」
- (2) 海外の人が楽しめる「日本的コンテンツ」
- (3) 誰でもすぐ輪に入れる「全員参加型」
- (4) オフラインの生音を通じた「ライブ体験」と「熱気」
- (5) 高齢の方や家族連れなどにも好まれる「夏祭り」

■地域との関係づくり

- ・研究学園地区のイベントへの参加
- ・吉瀬地区のお囃子保存会との交流

■留学生との交流

学内で盆踊りの体験会「踊練」を開催



盆LIVE 2016

開催日時：2016年9月17日 15:00～20:00

開催場所：研究学園駅前公園

主催：盆LIVE 実行委員会

共催：筑波都市整備株式会社

後援：つくば市／つくば市教育委員会／筑波大学「T-ACT」

今年度はコンセプトに「満月」を取り入れ、開催日は満月の夜でした。月に関わる曲目、幕、ライト等の作成を行いました。

*program

- 15:00～ 代表挨拶・吉瀬三日月囃子保存会演奏
- 15:30～ 第Ⅰ部「生演奏 本格盆踊り！」
炭坑節／東京音頭など和の伝統曲で本格的に。
- 16:00～ パフォーマンス
シーディ・ファイ × Group Jamm／ときめき太鼓塾
- 16:40～ 竹灯電点灯式
- 17:00～ 第Ⅱ部「対BON! 古今東西」
第Ⅰ部で登場した振り付けが、洋楽やJ-POPとコラボ。
- 18:10～ サイリウム配布
- 18:30～ 第Ⅲ部「盆LIVE限定バンドの生演奏で踊り狂え！」
この日のために結成された盆LIVE限定バンドが満を持して登場！

Main Event



お客様の声

- *ライブ演奏での盆おどり、うきうきしました
- *昔ながらの曲、Jpop ありでよかった
- *外国の方がたくさん来ていたことが印象的
- *伝統芸能も来ているところが良かった
- *進行の仕方がまだ不十分、時間も押していた
- *音量が大きかった

Voice

来年度に向けて

参加者数は悪くなかった一方、お子さん・外国の方への対応の不十分さが目立ちました。また、一件ではありますが騒音に関してメッセージを頂いたため、今後イベントを続けていく上で市民の方々の迷惑とならないよう、細心の注意を払っていきたくと考えております。今年度の反省を生かしながら、1年目以上に築くことのできた地域とのご縁を大切に、只の学生ではなく対等なつくば市民同士としてつくる祭りに成長できるよう、邁進してまいります。

Next



- *盆踊りプロジェクト
- *企画番号：【16002A】
- *ホームページ：
<http://tsukuba-bondance.wixsite.com/bon-live>

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

「東北三県柔道キャラバン」

【活動地域：福島県郡山市】

体育系 准教授 増地 克之

1 事業の概要

本事業は、東日本大震災の被災地域である岩手県・宮城県・福島県の三県を対象に、地域活力の復興とコミュニティの活性化を目的として、当該地域の子ども達に対して柔道指導を行うとともに本学柔道部がこれまで蓄積してきた柔道指導法研究の成果を地域の柔道指導者に伝達するものである。

2 事業成果の概要

本事業は平成 25 年度より継続して実施しており、今回で 5 回目である（平成 25 年度は 2 回実施した）。今回の事業では福島県郡山市にある田村高等学校に訪問し、地域の子どもたちに柔道指導を実施した。対象とした田村高校は震災当時、避難所として活用され運動部活動が禁止されていた。また柔道部には震災で大きな被害を受けた生徒もこれまでに多く在籍しており、また来年度も大きな被害を受けた生徒が入学してくる。

本事業の具体的な実施内容についてである。本事業は平成 28 年 12 月 26 日～ 27 日の 2 日間に渡って実施された。講師として、本学柔道部から小野卓志六段（柔道部監督）、川戸湧也四段（3 年制博士課程 1 年次）、内田暁参段（修士課程 1 年次）、川口優大弐段（博士前期課程 1 年次）、三戸雄生参段（体育専門学群 4 年次）筆者の 6 名が参加した。学外からは本学柔道部の卒業生である秋本啓之五段、栗野靖浩参段、長倉友樹参段の 3 名が参加した。

1 日目は田村高校柔道部の生徒を中心に、34 名の生徒が本事業に参加した。ここでは秋本氏・小野氏より背負投ならびに内股を施す際のポイントについて子たち達に指導をした。その際、指導者らには iPad などの端末を用いてビデオ撮影してもらい、一連の指導について映像記録を取ってもらった。

2 日目も田村高校の柔道場で実施したが、この日は高校生のみならず、地域の小学生から中学生まで、総勢 60 名が本事業に参加した。ここでは初めに講師陣から柔道に対する取り組み方についての講話を行なった。栗野氏は「具体的な目標を設定すること、目標と

する選手の技を真似することが柔道を上手にする近道である」と語っていた。三戸氏は「将来、自分がどうなりたいかを具体的にイメージして柔道と勉強とを両立してほしい」と語っていた。講話の後は三戸氏・長倉氏から固技における相手の返し方について、子たち達に指導をした。その際、前日の投技の指導と同様に指導者らには iPad などの端末を用いてビデオ撮影してもらい、一連の指導について映像記録を取ってもらった。



図 1. 固技を指導する秋本氏

3 地方自治体との連携

本事業の実施にあたっては福島県の指導主事で、本学柔道部の卒業生でもある佐々木勝宏氏に視察に来ていただいた。また本事業の実施にあたっては福島県のみならず東北高校、日本大学東北高校の先生方にもご協力をいただいた。

4 今後の展望

東日本大震災が発生してから 6 年が経過しようとしているなか平成 28 年 4 月に平成 28 年熊本地震が発生した。この地震では国内 5 例目となる最大震度 7 を観測し、益城町を中心に甚大な被害が出た。未だ復旧の途上にあり、被災当時の東北地方同様に地域活力の低下が懸念される。そこで、今後は本事業ならびにこれまで本学柔道部が取り組んできた事業の成果を集約し、熊本への柔道活動を通じた支援を行なっていきたい。

高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト 広報誌を介した地域づくり

【活動地域：茨城県つくば市】

人間系 教授 原田 悦子

1 事業の概要

みんラボ（みんなの使いやすさラボ）は、「使いやすさの検証」を研究目的として2011年10月に開設された。社会貢献活動として、地域在住の高齢者二百名余りがラボ会員として登録しているが、その中から、みんラボの活動を広く地域に広げたいという要望が生まれ、広報誌である「四季報」が発行されることとなった。みんラボでの活動や「生活の中の使いやすさ」に関わる地域の出来事が発信されている。

2 事業成果の概要

みんラボの高齢者会員が編集委員となり、みんラボ事務局のサポートと共に、月に1～2回、編集会議がみんラボにて定期的に行われてきた。原稿の作成にあたり、編集委員はみんラボに関わる研究者や企業に記事を依頼したり、みんラボの様々な活動取材したりした。その上で、掲載する記事の内容の決定・分担・推敲・レイアウト・校正を行った。この一方でみんラボ事務局と筑波大学学生は、議事録の作成、記事の情報提供などを行った。編集会議の活動を経て出来上がった原稿の印刷を、編集委員が印刷会社に依頼し、「四季報」が発行された。



編集会議の様子

平成28年度は、「四季報」7号、8号、9号を発行した。みんラボで行われている活動を記載したこの広報誌を、高齢者会員が市民団体等や公共施設に配布、設置することで、みんラボの活動が広く紹介されている。みんラボ事務局も、地域の高齢者や学生・研究者、

一般企業等に活動を紹介するツールとして、「四季報」を役立てており、この広報誌を見た方々からも「わかりやすい広報誌である」との評価をいただいている。

また今年度は、「会員にいろいろな側面から活動に興味を持ってもらえるように」ということで、「みんラボ音頭」を創ろう、という話も編集委員会から提案され、作詞・作曲のためのワークショップを実施した。さらにダンスの専門家でもある本学の大学院生による振付指導の会も開催し、それらの報告と「一緒に歌いましょう、踊りましょう」という内容の記事も掲載され、コミュニティ誌としてさらに充実したものとなった。

編集委員は、「四季報」の作成に積極的に参加しており、毎号掲載される「編集後記」からは、編集活動を通じてみんラボでの活動をより楽しいものにしようという意欲も伺えた。



H28年度公刊された「四季報」の一部（7、8号）

3 地方自治体との連携

四季報はみんラボ会員宅に郵送するだけでなく、つくば市内の市役所・交流センター・社会福祉協議会・病院、守谷市と牛久市の公共施設等に、継続的に置かせていただいた。

つくば市における健康づくり運動を起点とした文化交流活動の促進

【活動地域：茨城県つくば市】

体育系 教授 長谷川聖修

1 事業の概要

毎年2月に開催される「つくば体操フェス」では、福島第一原発事故で福島県双葉町からつくば市に避難した住人による、国の重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の「相馬流れ山踊り（写真1）」が披露されている。この踊りを本学学生が共に踊るワークショップを企画した。こうした文化交流活動を通じて、震災復興で直面する様々な課題を継続的に考える機会とした。



写真1 相馬流れ山踊り

2 事業成果の概要

平成28年11月19日（土）体育科学系B109において、中村富美子氏（「相馬流れ山踊り」保存会会長）を講師として、本学院生・卒業生10名が参加した。この踊りの歴史的経緯や各種動作の意味などについて解説を受けながら、扇子（写真2）や柄杓（写真3）を用いた基本動作を習得した上で、15分の踊りを一連の動作として体験した。



写真2 扇子を使って舞う様子



写真3 柄杓を用いて馬に水をあげる踊りの様子



写真4 反省会・情報交換会の様子

ワークショップ終了後、その体験を振り返りながら、講師を囲んで、東日本大震災以前から現在に至るまでの本踊りの歴史や「相馬流れ山踊り」保存会としての活動内容について話を聞いた（写真4）。また、今後、伝統ある文化活動を次の世代へと伝承していくための課題についても意見を交換した。

3 地方自治体との連携

つくば体操フェスティバルは、つくば市・つくば市体育協会などの後援を得て、活動を進めてきた。なお、本プロジェクト名を明記したTシャツを作成して、つくば体操フェスで演技を行った（写真5）。



写真5 う+つく（ば+ふく）しま体操教室の参加者

4 今後の展望

東日本大震災から6年以上が経過し、その「風化」が進んでいる。それ故、福島県双葉町のように帰還困難区域からつくば市に避難してきた人たちの暮らしに寄り添い、「相馬流れ山踊り」のような伝統ある豊かな文化を大切にして次の世代へと繋げていかなければならないと考える。今後も対象を広げて文化交流を促す講習会を定期的に行う必要がある。そのためにも、年間を通じて継続的に開催されている「うつくしま体操教室」の活動とも関連させながらその方策を検討していきたい。

成長発育期（小・中学生）に発生する運動器障害に対する「健康手帳」を用いた運動器検診とトレーナーによる障害予防活動

医学医療系 整形外科 鎌田 浩史



平成28年度 社会貢献プロジェクト



成長発育期（小・中学生）に発生する運動器障害に対する「健康手帳」を用いた運動器検診とトレーナーによる障害予防活動

医学医療系 整形外科 鎌田 浩史

プロジェクト背景

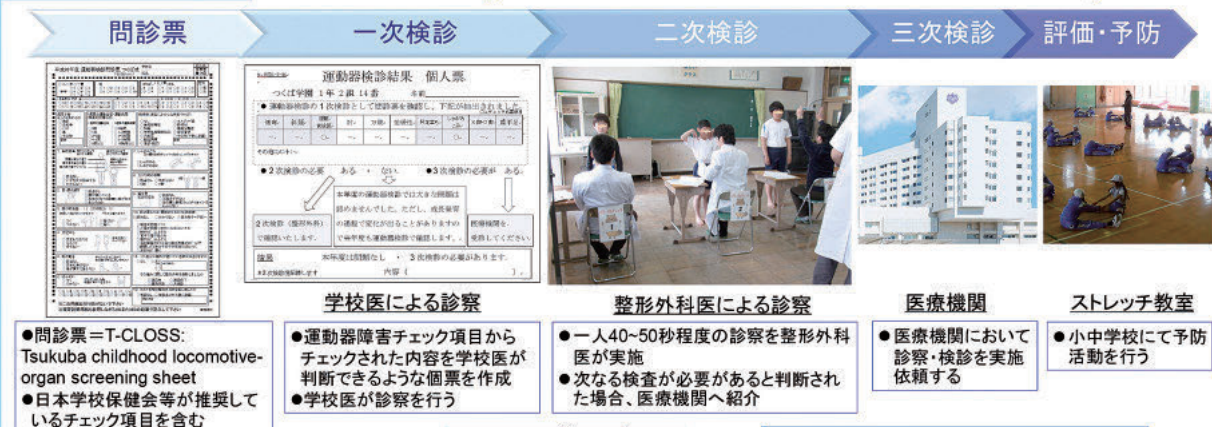
われわれは、茨城県内の小中学生に対して2008年度より「健康手帳」を用いた運動器検診を行っている。その中、学校保健安全法の一部改正により、平成28年度の学校検診から児童生徒等の「四肢の状態」を必須項目に加えて検診を行うことが規定され、新たな検診体制が求められる。

平成28年度の取り組みは、

市内統一した運動器検診方法の施行

トレーナーによる運動器障害に対する予防活動

取り組みの概要



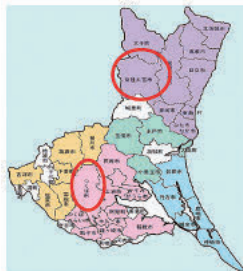
結果

つくば市

全 小学校
全 中学校
義務教育学校

常陸大宮市 全 小学校
全 中学校

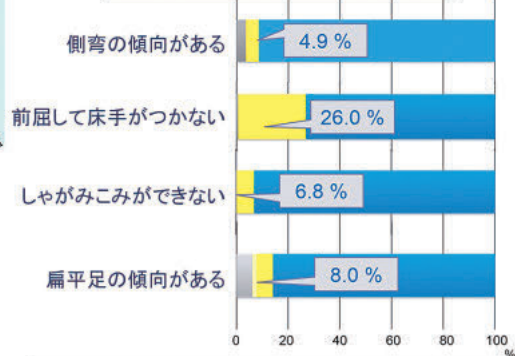
計 22,494人



つくば市 19,244人

小学生: 13,638人 中学生: 5,606人

マークシートによる抽出結果



1次検診から3次検診の抽出（直接検診の学校を除く）

	小学校 10,506人	中学校 4,668人
問診票マークシートにて 何らかのチェックあり	49.2 %	69.8 %
問診票結果から学校医が 2次検診へ抽出	22.4 %	30.8 %
整形外科医が 3次検診へ抽出	1.5 %	4.1 %

今後の展望

- 平成28年度の運動検診の反省をいかして
 - ☞ マークシートの作成 更新
 - ☞ 養護教諭・学校・市にアンケートを取り、意見を反映
- 小中学校へのトレーナー介入
 - ☞ ストレッチ教室、部活動など運動障害への介入

知的障害を伴う自閉症児の健全育成セミナー

【活動地域：神奈川県横須賀市・三浦市・逗子市】

附属久里浜特別支援学校 副校長 雷坂 浩之

1 事業の概要

知的障害を伴う自閉症の子供たちは、その障害特性上一人で余暇を過ごすことが苦手である。また、その保護者も子供の余暇活動を支援する手立てを持たず、放課後や休祭日などに子供との過ごし方が分からず、子供の問題行動等に手を焼いている様子が窺える。保護者だけでなく、放課後デイサービスなどの事業所の職員も同様の問題を抱え、以前から本校に対し適切な対応の仕方に関する情報提供を求める声が多く寄せられており、そのニーズに応えるべく保護者（本校以外と同じ障害児を持つ地域の保護者）や放課後支援サービスなどの事業所職員等を対象としたセミナーを開催した。

2 事業成果の概要

余暇活動に関するセミナーは、「ipad 保護者学習会」（平成 28 年 10 月 16 日）とし、NPO 法人支援普及促進協会の高松崇理事長を講師に迎え、第 1 部では子供と保護者が親子で楽しめるアプリケーションの使い方や使用時のルールの守らせ方などについて、講演を中心に指導助言を頂いた。第 2 部においては、同氏を講師として、横須賀市内の公立特別支援学校の教員や放課後支援施設の職員等を対象として、教材としての ipad の有効性や指導上の留意事項・配慮事項などの情報交換会を行った。



ipad 保護者学習会

保護者からは、子供が一人で楽しめるアプリケーションを知ることができた、生活自立に有効な使い方が分かったなどの意見が寄せられ、地域の特別支援学校の教員からは ipad の教育的使用方法や使用上の配慮事項、機能制限の設定方法等の情報が得られて、大

変参考になった、施設職員からは ipad を子供を静かにさせるためのツールとして使っていたことの違いに気づかされたなどの意見が寄せられた。

第 2 弾のセミナーは、横須賀市歯科医師会横須賀口腔衛生センター・障害歯科認定衛生士の阿部英子氏をお招きし、「予防歯科」をテーマに講演会形式のセミナーを開催（平成 29 年 1 月 18 日）した。このセミナーの対象は、保護者や地域の特別支援学校教員、歯科医師や看護師とした。



予防歯科講演会

障害を持つ子供たちにとって、病院の受診はかなりの困難を伴うことであり、特に歯科治療には恐怖心を持っていて、パニックを起こし治療室にすら入ることのできない子供が多い。よって、虫歯の治療を受けるために拘束衣を着用させられたり、全身麻酔で行うこともある。そのため、子供たちが落ち着いて適切な環境で治療を受けることができるようになるための条件整備が重要であり、治療に至る前の予防的な指導・支援も大切であるとの講演を聴いた。講演の内容からは、保護者や教員には、学校や家庭における予防歯科的な指導の仕方を、歯科医にとっては、子供たちが落ち着ける環境として、白衣を脱ぐなどの恐怖感の払拭から始めることの重要性を理解してもらうことができた。

セミナーの第 3 弾は、本校の幼児児童とその保護者、卒業生、普段お世話になっている放課後デイサービス事業所の職員や地域住民をお招きして「きらきらコンサート」を開催（平成 29 年 1 月 26 日）した。

これは、子供たちの余暇支援の一環として、プロの生の演奏に触れる機会を通じて、子供たちに鑑賞時の

マナーを学ばせたり、楽器の演奏や合唱が楽しめるようになることを目的にした。奏者は、作曲家でありピアニストの谷川賢作氏（谷川俊太郎氏の長男）とパーカッショニストの安井希久子氏であった。

障害を持つ子供たちは、コンサートを楽しむにも、会場までの交通機関の移動が困難であったり、大勢の観客がいる会場で落ち着いて過ごすことが苦手であることから、よく慣れた校内で保護者と一緒に安心して生の音楽を楽しむ良い機会となった。



きらきらコンサート

3 地方自治体との連携

「iPad 保護者学習会」と「予防歯科」のセミナーは、開催の広報を横須賀市・三浦市・逗子市のそれぞれの教育委員会に協力を仰いだ。また、横須賀市歯科医師会の後援を得ることができた。

「きらきらコンサート」は、障がい児を持つ親の会や町内会などに参加者募集の依頼を行った。コンサートは、本校の行事の一つでもあることから、今後も引き続き開催する予定でいる。

4 今後の展望

本校の社会貢献として、障がい児の健全育成のため、今後も様々なテーマでのセミナーやイベントを企画・開催する予定である。本年度は、よりニーズの多かった、「予防歯科」を優先してテーマとしたが、本来予定していた「性指導」も、思春期の子供たちには大切な課題であり、保護者にとっても深刻な問題であることから、次年度はメインのテーマとして取り組んでいく予定である。

地域における子育て支援広場事業の開催と乳幼児教育相談の実施

【活動地域：東京都文京区】

人間系 教授 柘植 雅義

1 事業の概要

本事業は、筑波大学附属大塚特別支援学校幼稚部と地域支援部が運営する子育て支援事業（にこにこひろば）である。

乳幼児の子どもの子育てに不安や悩みを抱える保護者は少なくない。中でも、発達に遅れや偏りがある子どもの保護者の苦悩は深刻である。

そこで、知的障害特別支援学校としての専門性を生かして地域社会に貢献することが、本事業の目的である。



2 事業成果の概要

本校では、平成17年4月より「にこにこひろば」を開催してきた。これまでの延べ利用人数は4,600人を超える。

障害の有無を問わず、本校を地域資源として子育て中の親子が活用することをめざしてきた。具体的には以下の4点である。

①遊び場の提供を通して、母子・父子（以下親子）のかかわりを豊かにする支援を行う。②講演会や協議の場を設け情報提供や情報交換を行うことにより、子育ての悩みや不安の解消への支援を行う。③仲間作りの場を提供することにより、子育ての孤立感や閉塞感を解消するための支援を行う。④支援が必要な親子については、地域支援部と連携をとり、早期療育、家庭支援、家族支援につなげる。

平成28年度は年間27回、毎週水曜日の10時から12時半に開催した。のべ利用人数は685人であった。また、本事業で採用した心理職スタッフによる教育相談の利用者は、38ケースであった。

3 地方自治体との連携

文京区内の保育所や幼稚園をはじめ、文京区教育委員会や療育機関等との連携をはかってきた。

また、本校には研修に関するニーズが非常に高い。平成28年度だけでも、発達に遅れや偏りがある子どもの支援に関する研修会に32回協力してきた。

4 今後の展望

平成26年1月、障害者の権利条約が批准され、共生社会の形成に向けインクルーシブ教育システムの構築が指向された。

特別支援学校における子育て支援ひろばは、障害のあるなしにかかわらず親子が集い交流するインクルーシブな子育て支援の場となっている。共生社会形成に向けた子育て支援のひとつのモデルとなると期待される。

2016年度

筑波大学附属大塚特別支援学校

にこにこひろば

子育て広場のご案内

おかあさん・おとうさんと一緒に
あそびにきてね！

園庭・遊戯室を

開放しています！

幼稚部の園庭や遊戯室で

いっしょに遊びましょう！

10:00～12:00 (10:45～11:15 頃「あつまり」があります。)

(原則として 第1～4 水曜日。長期休業中を除きます。)

持ち物 *登録時、傷害保険(年間500 円)にご加入
いただきます。

*着替え、飲み物をご持参下さい。

*持参したお弁当を食べることもできます。
(12:00～12:30)



しんかんせんの すべいだいで あそぼうね

乳幼児教育相談を行っています！

日程：にこにこひろば実施日（裏面参照）の 11:30～12:30 頃

(原則として 第1～4 水曜日。長期休業中を除きます。)

※ 申し込み制です。相談中にお子さんの保育もできます。



たのしい おもちゃも たくさんあるよ！

お問い合わせ・教育相談お申し込み

- ・「にこにこひろば」は申し込み制ではありません。開放日に直接お越しください。
 - ・「乳幼児教育相談」は電話かファックス、またはメールにてお問い合わせください。
- ☆電話受付…14:00～17:00(月～金)にお願いいたします。

筑波大学附属大塚特別支援学校

〒112-0003 文京区春日1-5-5

電話 03-3813-5643(幼稚部) 03-3813-5569(代表) FAX 03-5684-4841

Eメール nikoniko@otsuka-s.tsukuba.ac.jp

【平成28年度キリン・子育て応援事業／筑波大学社会貢献プロジェクト】

住民主導による健康減量教室の普及

【活動地域：茨城県土浦市】

体育系 教授 田中喜代次

1 事業の概要

平成 27 年度より茨城県土浦市において「住民主導型健康減量教室」を開催し、その成果検証を進めてきた。本事業は地域住民を「土浦市ダイエットリーダー（リーダー）」として養成し、地域住民に向けた減量支援を担っている。

昨年度の教室終了後に、フォーカスグループインタビュー（FGI: focus group interview）をおこない、本事業に関わる課題を抽出した。今年度はそれらの課題を考慮した上で、更なる地域展開を目指し、より質の高い減量支援の実行を試みた。

2 事業成果の概要

◆新たな取り組み “土浦市ダイエットレシピ”

昨年度の FGI から抽出された課題に基づき新たに「土浦市ダイエットレシピ」を提案した（図 1）。新たな取り組みの目的は、参加者同士のコミュニケーションの促進および減量達成のための食事法のスキル習得である。

減量取り組み中には摂取エネルギー量に見合ったレシピを考案し、参加者全員に解説した。調理デモおよびレシピ考案に際しては、料理教室の講師や食生活推進員として、既に土浦市内で活動中の調理の得意なリーダーが主体となった（写真 1）。

図 1 配布した“土浦市ダイエットレシピ”の一部

【参加者の感想】

「調理デモはとても楽しかった」、「今まで食べなかった野菜などを新たに含めるようになった」など。



写真 1 “調理デモ” 試食の様子

◆減量支援の成果

今年度、新たに養成されたリーダー 2 期生の 21 人が中心となって減量支援を担った。健康減量教室には、40 人が参加し、32 人（男性 7 人、56.8 ± 11.4 歳、BMI 28.5 ± 4.2 kg/m²）が 3 ヶ月間の教室を完遂した。体重減少量は 5.6 ± 2.8 kg と有意な減少が認められ、昨年度の課題であった脱落率（48.3%）については、顕著な改善がみられた（20.0%）（図 2）。

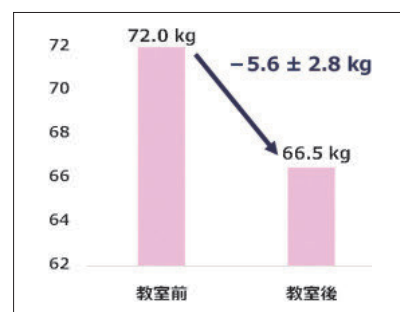


図 2 教室参加者 32 人の体重変化

3 今後の展望、地方自治体との連携

本事業の継続については、土浦市側から強い要請を受けており、減量支援を担うリーダーの活動継続の意思も確認している。

平成 29 年度も本プロジェクトは継続中である。また、2 つの会場で健康減量教室を開催し、さらなる地域展開を企画中である。



土浦市イメージキャラクター つちまる

復興作業およびスポーツ振興を通じた被災地での支援活動

【活動地域：岩手県大船渡市】

体育系 助教 奈良 隆章

1 事業の概要

平成 29 年 2 月 18 日、19 日の 2 日間にわたり岩手県大船渡市を訪れ、両日ともに岩手県立大船渡高校硬式野球部（合計 11 名の参加者）を対象に野球教室を行った。本学研究員である木村文律氏のご協力の下、大船渡高校に硬式野球部関係者を派遣し、野球の技術指導を行った。

2 事業成果の概要

本学硬式野球部は、2013 年 12 月に岩手県立大船渡高校の生徒を対象に野球教室を行っている。あれから 3 年の月日を経て、被災地域の更なる活性化を目指し、本プロジェクトを実施した。

1 日目は大船渡高校野球場において、守備の基本練習を中心に指導を行った。守備練習ではポジションごとにグループをつくり、専門的な指導を行った。2 日目は打撃練習、体力トレーニングを中心に指導を行った。打撃練習では大学生がマンツーマンで指導することができたため、相互のコミュニケーションが活発になり、活動の質が一層高まった。また、体力トレーニングについては、障害予防およびパフォーマンス向上の観点から、動作と注意点を説明した。

両日ともに厳しい寒さの中での活動となったが、参加者全員の積極的な姿勢により、多くの収穫を得ることができた。高校生の技術的な変化はもとより、意識・行動面についても成長を感じることができた。さらに、本年 3 月には大船渡高校野球部と本学硬式野球部が練習試合を行うなど交流が続いており、その試合においても彼らの成長を確認することができた。

3 地方自治体との連携

本プロジェクトは、岩手県立大船渡高等学校の教員、保護者の皆様と連携を図ることによって実施することができた。また大船渡市内に位置する本増寺の僧侶である木村文律氏（本学体育系研究員）には会場準備やスケジュール調整等でご尽力いただいた。

4 今後の展望

本プロジェクトは平成 25 年度からの継続課題であり、東日本大震災で特に大きな被害を受けた岩手県、福島県、宮城県において、野球教室を行い、被災地域の活性化を目指してきた。上記 3 県すべてにおいて活動を行ったことで、教育機関および地域の方々との連携もプロジェクト開始当初と比べて円滑になっている。今後はそのつながりを生かし、野球教室の開催頻度の増加および活動範囲の拡大を目指していきたい。

5 その他

本プロジェクト 2 日目の野球教室終了後に、東日本大震災において甚大な被害を受けた大船渡市、陸前高田市の現状を見る機会を得た。本学の学生たちは、メディアで報道されている内容とは大きく異なる現状を目の当たりにし、多くのことを感じ取ったようだ。本プロジェクトでは、指導者として派遣された学生および教員についても、多くの学びを得ることができた。



野球教室終了後の記念写真

常総市復興計画推進に向けた大学院講義と連動したまちづくりワークショップ

【活動地域：茨城県常総市】

システム情報系 准教授 藤井さやか

1 事業の概要

常総市は 2015 年 9 月の関東・東北豪雨で鬼怒川以東のほぼ全域が水没するという甚大な被害を受けた。被災以前から共同研究やまちづくり推進事業等で同市と密接な研究・教育体制を構築していたシステム情報工学研究科社会工学専攻・システム情報系社会工学域では、延べ 100 名以上のボランティア派遣と、復興に向けた計画策定や調査分析を支援してきた。

2016 年 2 月策定の「常総市復興計画」では 4 つの柱と重点目標・施策を掲げ、重点目標「力を合わせる」で大学等との協働による復興に言及している。本プロジェクトはその取り組みのひとつとして、社会貢献プロジェクトを通じた復興支援を行うものである。

具体的には、2016 年 10 月から 12 月にかけて、秋 AB 学期・システム情報工学研究科社会工学専攻開講の「プレイスメイキング」及び「ファシリテーター育成プログラム」の講義と連動したワークショップを実施した。検討テーマは常総市との協議を受けて、「空き家を活用した復興まちづくりの提案」とした。

2 事業成果の概要

本プロジェクトでは、10 月上旬に現地視察を行い、常総市役所、堤防決壊・復旧現場、空き家活用の検討が進む森下町、NPO 法人コモンズ助け合いセンター JUNTOS、石下地域交流センター（豊田城）などを見学した。また 10 月中旬には空き家となっている旧片野医院及び母屋で実測ワークショップを行った。

10 月から 12 月にかけては、4 つのグループで現地調査（統計資料の整理、関係主体へのインタビュー、アンケート、空き家調査等）を行った。調査結果は毎週の講義時間中に他のグループとも共有され、参加者全員での方針の討議を繰り返し、4 つのグループ提案を練り上げていった。その過程で、常総市役所や地域の復興を支援する NPO とも意見交換を行い、地域のニーズに即した提案内容となるよう検討を行った。

最終的な提案は以下の 4 テーマで、2016 年 12 月 20 日には一般市民向け、2017 年 3 月 27 日には市長をはじめとする市職員向けの提案発表会を行った。

①絆～空き家再生への挑戦～：空き家での交流促進

②めんじょでニシヨク：旧青柳製麺所活用案

③かたのさんち～地域住民のサードプレイス～：
旧片野医院活用案

④空き家活用システム：行政の制度設計

提案は個別の独立した内容ではなく、相互に有機的に関連している。①絆～空き家再生への挑戦～では、水没期間が相対的に長く、被害が深刻であった森下町橋本町を対象に、地域の気軽な交流が失われ、住民の孤立が進んでいること、増加する空き家の活用が必要であることを指摘した。それに対応して、②めんじょでニシヨクでは、浸水被害で閉鎖された製麺所跡地を食堂や移動店舗の開店場所として活用し交流拠点とする案を提示した。その活動を受けて、③かたのさんちでは、地域住民が長年通院していた片野医院跡と母屋を活用して、子どもを中心に多世代が交流できる拠点を地域住民と作り上げる案を提案した。以上の取り組みを支援するため、④空き家活用システムでは、全国の先進自治体の取り組み等を整理し、空き家活用を促進するための行政による制度設計について提案した。

3 地方自治体との連携

本プロジェクトの実施に際して、常総市役所及び NPO 法人コモンズ助け合いセンター JUNTOS と連携してテーマ設定や調査を行い、結果を両者に報告した。

4 今後の展望

間もなく水害後 2 年が経過しようとしている。現在の常総市は、きれいに片付き、復興が進んでいるように見える。しかし、若年層の流出や空き家の増加は続いており、復興への道のりは長い。社会貢献プロジェクトでの支援は終了するが、今後も様々な形で継続した支援を行っていきたい。

5 その他

当日の様子や提案内容の一部を紹介する。



写真1：学生による発表の様子



写真2：発表会場の様子（常総市役所）

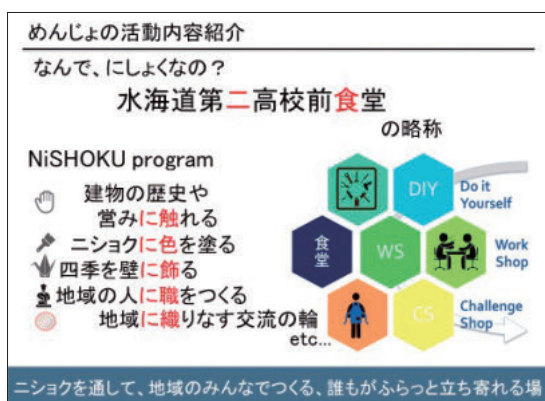


図1：②めんじょでニショクのコンセプト



写真3：製麺所跡の活用案
(左：現在の様子 → 右：活用後の様子)



写真4：製麺所裏側の活用案
(左：現在の様子 → 右：活用後の様子)



図2：復興まちづくりの展開イメージ

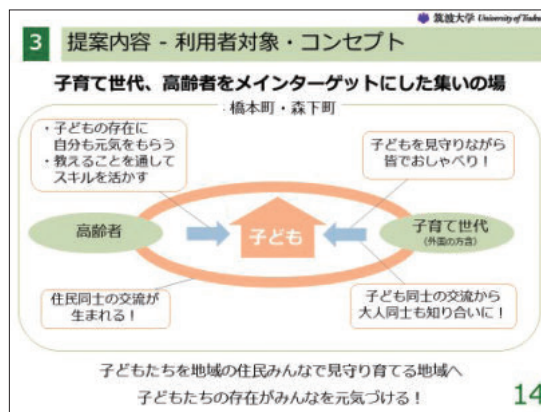


図3：③かたのさんちのコンセプト

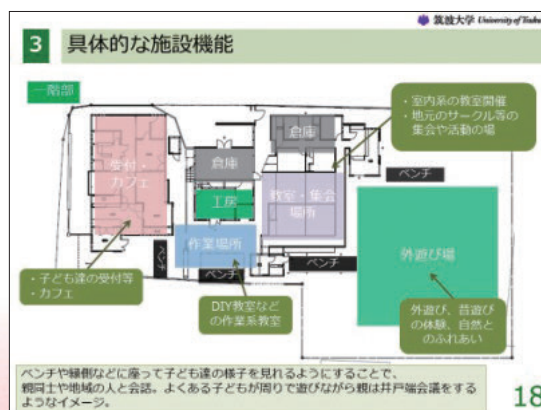


図4：既存建物の活用案

筑波大学 社会貢献プロジェクト 2016－17

発 行 月 平成 29 年 10 月
発 行 元 筑波大学総務部総務課
〒 305-8577
茨城県つくば市天王台 1-1-1
E-mail chiiki@un.tsukuba.ac.jp
URL : <http://scpj.tsukuba.ac.jp/>
印 刷 いばらき印刷株式会社



筑波大学

University of Tsukuba